

田中親美透写古筆切「名葉集」の研究(5)

小島 孝之

『名葉集 下』前半の内容

194 聖徳太子 戸隠切

下は、『古筆名葉集』の通例に倣って経切から始まるが、既存の国宝手鑑などには見られない新出の断簡が多い。古筆切じたいとしては貴重な発見であるが、国文学研究の視点からは残念ながらそれほど研究の進展に寄与する事柄は多くないと言わざるを得ない。その意味で暫く退屈な作業になるが、紙幅を費やすことをお許しいただきたい。

まず最初に登場するのは伝聖徳太子筆の「戸隠切」である。具引きを施した美麗な料紙に一行に八基の宝塔の形を雲母で摺り出し、一つの塔の中に一文字を書写する一字宝塔経と呼ばれる装飾経である。長野県の戸隠神社に伝来したことから

命名されたらしい。元来は『法華経』八巻と開経の『無量義経』と結経の『観普賢経』を合わせた十巻が揃って伝来した筈であるが、現在の戸隠神社には三巻の卷子本が伝存するのみで、それ以外には断簡として諸家に分蔵されている。院政期の名筆家として有名な藤原定信の代表的な真筆遺品として重要なものである。本断簡は新出の一行の断簡である。所蔵者等の記載はない。内容は『法華経』譬喩品(大蔵経16頁上段21―22行)の一行である。縦二九・二、横一・九cm。界罫は不明。(図1)



図1

(翻刻)

可為説若直柔軟常

195 聖徳太子 戸隠切

本断簡は、国宝手鑑『藻塩草』に貼付された断簡の透写である。よつて以下を省略する。

196 聖徳太子 大秦切

本断簡右上の見出しに「聖徳太子」とあり、右下に一文字「谷」（所蔵者名か）とある。左下に「紺紙銀野金書剥落せし所 ■ノ様 □■□」とあるが、所々虫損のために読めず、判り辛い。が、紺紙銀野金字の『法華経』であること、一行九字であること、書風とから、伝聖徳太子筆「大秦切」であると推定する。「大秦切」は「戸隠切」と同様の一字宝塔経であるが、本透写では宝塔の有無は分からない。また、「大秦切」は一行十字とされるが、一行八字、九字のものもあり、果たしてすべて同一の経の断簡であるのかも疑わしい。筆跡は「戸隠切」に類似しているが藤原定信とは認められない。また定信の父定実の書風にも類似するがこれも認められない。春名好重氏は『古筆大辞典』に於いて、「『大秦切』の書風は、仁平四年（一一五四）五月一日書写の『紺紙金字大威徳陀羅尼経』（乗宝寺所蔵）の書風とよく似てい

る」と述べている。本透写を「大秦切」と断ずるのはいささか躊躇われるが、「大秦切」の実態がよく分からないので、一応「伝聖徳太子筆大秦切」としておきたい。内容は『法華経』譬喩品（大藏経10頁下段9―11行）である。縦三〇・八、横六・二cm。界二五・八、野二・〇cmの三行。（図2）



図2

（翻刻）

我等不解方便隨宜所

説初聞佛法遇便信受

思惟取澄世尊我從昔

197 吉備真備 虫喰切

本断簡右上の見出しには「吉備真備 虫喰切」とあり、虫損の形状を克明に写している。内容は『成唯識宝論』卷一（大正蔵77頁中段29行―下段3行）の三行である。縦二六・八、横三・三cm。外界一五・八、内界一四・七cm。（図3）

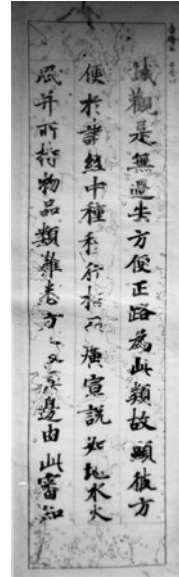


図3

(翻刻)

識觀は無過失方便正路為此類故頭彼方

便於諸經中種種行相而廣宣說如地水火

風并所持物品類難悉方■無邊由此審知

198 菅原道真 式切類切

『古筆名葉集』の類には比較的早くから「式切」という名称が登場している。伊井春樹等編『新版古筆名葉集』によって見ると、内閣文庫蔵『古筆家秘書』に「式 二段圭四寸六分 七分半 十字一行朱 星 行字不動講式」とあるという。この○内は朱による書き込みだそうであるから、後人による書き込みかもしれない。静嘉堂文庫蔵『古筆切目安』には該当する記載はなく、文政十一年版『古筆名葉集』になると、「式ノ切 白紙墨書朱点アリ法会ノ式文也」と「式ノ

切」なる名称が記載される。安政五年版『増補新撰古筆名葉集』には「式切 白紙墨野朱星アリ不動講式行書」と内容が特定される。田中塊堂編の『昭和古筆名葉集』では、この『増補新撰』の記述を踏襲してさらに、「七寸四分野高四寸一分」という寸法の説明が加えられている。しかし該当する「式切」の断簡となると、「講式」の断簡などというものはない。国宝手鑑『藻塩草』に貼付された断簡が、古筆家宗家によって「式切」と極められた数少ない断簡であるが、もちろん「不動講式」ではない。「深密儀軌云」として経文が五字＋五字の一行十字で引用されている。引用されているのは『金剛頂瑜伽降三世成就極深密門』の偈の部分である。『古筆家秘書』に言う所の「十字一行」、「二段」という説明には該当する。他に該当しそうな断簡は、国宝手鑑『翰墨城』に貼付される断簡で、料紙の縦寸法がかなり短い、元々上下の余白がかなり広いので切断しづらい。野の寸法はほぼ一致しているからである。「十字一行」「朱星」という点は合致する。内容は「勝軍不動明王四十八使者秘密成就儀軌」（他にも内容の一致する儀軌は二種ある）。こちらは二段書にはなっていない。他に料紙の寸法がほぼ一致し「一行十字」の条件を満たす「式切」に該当しそうなものを探すと、重文手鑑

『高松帖』所収の断簡がある。こちらの内容は『金剛手光明灌頂経 大威怒念誦儀軌法品』の引用である。もう一点、平成十八年七月の『思文閣古書資料目録第197号』に紹介された手鑑『毫戦』（現在は東京国立博物館に収蔵）に貼付された断簡がある。こちらの内容は、『金剛峰楼閣一切瑜祇経 修行法秘密問答』又は『大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』のいずれかと思われる。もしこれらが同一書物からのツレの断簡であるならば、原本は何らかの儀軌を集成した仏書であったかと推測される。

さて、透写の本断簡に話を戻すと、「二行十字」「二段」の条件は満たしており、一応「式切」と見做してもよさそうなのだが、後述するように寸法がかなり異なる。「式切」に書式等が類似する断簡が、それなりに多くあるようであり、本断簡もそうした物の一つである。これらの中に真正の「式切」が混入している可能性も排除はできないが、取り敢えず「式切類切」としておく。内容は『浴仏功德経』その他、一致する文言を有する仏書は多数あり限定できない。寸法は、縦二〇・八、横三・三cm。外界一五・八、内界一四・七cmで、寸法的に「式切」とは異なるようである。左下に「田中子爵元氏井^田」とある。「田中子爵」とは田中光顕のことかと思

われる。「田中光顕」は明治四十年に伯爵に任ぜられるが、本断簡の書写は明治四十年以前かと思われるのと、田中親美と田中光顕が知己の関係にあつたことからの推測である。(図4)

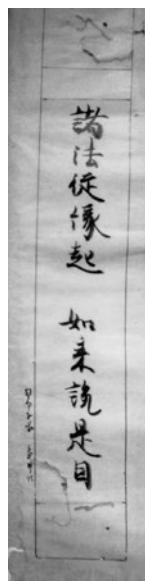


図4

(翻刻)

諸法從縁起 如来説是因

199 菅原道真 河内切

菅原道真の真筆の遺品は残っていないとされているが、伝道真筆の経切は非常に多い。学問・文道の神と崇められるがゆえの現象であろう。本断簡は『金光明最勝王経』卷三(大正蔵415頁上段2-4行)の二行で、通常菅原道真筆「河内切」と称されるものに当たる。本書の見出しにも「菅家河内切」と記されている。「河内切」の名称の由来は河内国の道明寺に伝えられていたからだというが、道明寺には道真の

伯母の覚寿尼がいたとされており、同寺には道真の用いた笏・石帯・硯なども伝来しているという。しかし、本断簡の元の『紫紙金字金光明最勝王経』は国分寺に収められていたもので、天平十四年発願の写経とされている。なお、『古筆名葉集』類には、「河内切」はなく、代わりに「紫切」として掲載されている。縦二四・九、横二・九cm。出典に「翰林帖」とある。(図5)

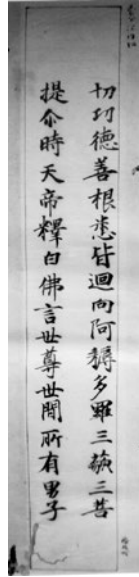


図5

(翻刻)

切功徳善根悉皆廻向阿耨多羅三藐三菩
提尔時天帝釋白佛言世尊世間所有男子

200 菅原道真 式切

見出しに「菅家 式切」とある。書写形式の「二段」には合致しないが、『藻塩草』の形式とは一致し、寸法も大体合致し、「式切」と見做してもよいのではないかと思う。内容

は『陀羅尼集経』卷八・金剛部の中卷に該当する文言がある。料紙は縦二二・一、横三・三cm。外界一五・八、内界一四・七cm、罫二・三cmである。これにも「翰林帖」の記載がある。(図6)

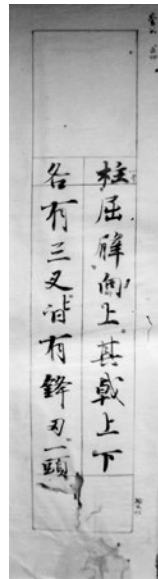


図6

(翻刻)

柱屈臂向上其戟上下
各有三又皆有鋒刃一頭

201 菅原道真 仏書切

これも見かけ上は「式切」に似ているが、罫線、界線が描かれていないのでそれ以外の仏書としておく。内容的にもこれに合致する經典は『大正新修大藏経』の範囲では見当たらない。儀軌の類か。傍記には「菅家」とあるのみ。縦一四・八、横一・三cm。下方に大きな破損がある。(図7)



図7

(翻刻)

鈔 不動 武内 阿弥 ■

202 菅原道真 筑紫切

内容は『華嚴経』巻七十(大正蔵381頁中段25行―下段9行)の十三行である。古筆切の中に、筆者を「天神」、「聖廟」、「菅公」などと極めた紫紙金字『華嚴経(八十卷本)』がある。白鶴美術館蔵手鑑所載断簡『華嚴経(八十卷本)』には「筑紫切」という切名が記されている。『古筆名葉集』類に「筑紫切」という名称はなく、唯一『増補新撰古筆名葉集』に至って初めて「河内切」の異称の一つとして登場するのみである。実際、国宝手鑑『見ぬ世の友』所載の紫紙金字『華嚴経(八十卷本)』の断簡には「河内切」とする極札が付属している。しかし、199の項で述べたように「河内切」は紫紙金字『金光明最勝王経』に付された名称であって、『華嚴経』の名称にするのは紛らわしい。白鶴美術館蔵手鑑の例に倣って「筑紫切」の呼称を用いることにしたい。本断簡には

何ら注記がないのではたして紫紙金字経であるかどうか不明であるが、寸法(特に界と罫の幅)の一致などから、一連の伝菅原道真筆紫紙金字華嚴経のツレと推定されるので、「筑紫切」とする。筆跡は天平経に相應しいものである。縦二六・六、横二四・四cm。界一九・五、罫一・九cm。(図8)



図8

(翻刻)

瑠雲及諸寶樹香海摩尼以為莊嚴於此蓋
中有菩提樹枝葉榮茂普覆法界念念示現
無量莊嚴毘盧遮那如來坐此樹下有不可
說佛刹微塵數菩薩前後圍繞皆從普賢行
願出生住諸菩薩無差別住亦見有一切諸世
間主亦見如來自在神力又見一切諸劫次第
世界成壞又亦見彼一切世界一切諸佛出

興次第又亦見彼一切世界一一皆有普賢
菩薩供養於佛調伏衆生又亦見彼一切菩
薩莫不皆在普賢身中亦見自身在其身內
亦見其身在一一如來前一切普賢前一切
菩薩前前一切衆生前又亦見彼一切世界
一一各有佛刹微塵數世界種種際畔種種

203 菅原道真 式切類切

本断簡は『翰墨城』所載の断簡であるが、前述の断簡（後掲）とは別の断簡。内容未詳の仏書である。書写形式がほぼ一致し、寸法が異なるので、一応、「式切」に似た断簡として、「類切」に分類した。以下は割愛する。

204 菅原道真 式切

前述した『翰墨城』所載断簡の透写。こちらは「式切」と認めてよさそうに思える。前述したように、『勝軍不動明王四十八使者秘密成就儀軌』に同文があるが、他にも同文を載せる仏書が二種あるので出典を特定はできない。以下は省略する。

205 菅原道真 讀岐切(2)

細字『合部金光明経』捨身品の七行である。本断簡は『藻塩草』所載の断簡であるから詳細は省略するが、「讀岐切」について整理しておく。文政十一年版『古筆名葉集』に「讀岐切」という名称が初めて登場する。特徴は「白紙墨字細字墨界アリ」とされている。『昭和古筆名葉集』になると、さらに「一行三十四字金光明経ヲ写ス縦罫ナシ」という説明が加わる。一行三十四字で『金光明最勝王経』を書写した経切が静嘉堂文庫に一卷あり（『日本の書跡』26掲載）、他に徳川美術館所蔵手鑑『玉海』に一葉3行、平成十七年六月の『阪急古書のまち古書目録』に一葉9行の断簡が見られる。『藻塩草』所収の本断簡は、一行四十五字前後、細字でぎっしり『合部金光明経』が書写されている。重文手鑑『月台』や徳

川美術館蔵手鑑『鳳凰台』、白鶴美術館蔵手鑑所載の切なども皆ツレと思われる。この『合部金光明経』の断簡の方が多く残存しているようだ。元々『古筆名葉集』が経切の内容を「金光明経」としか特定していないので、どれが真正の「讃岐切」なのかは一概に決められない。故に『金光明最勝王経』の方を「讃岐切(1)」、『合部金光明経』の断簡を「讃岐切(2)」と区別することにした。したがって本断簡は「讃岐切(2)」になる。なお、一行四十五字の『法華経』もあり(美保神社蔵手鑑所載断簡等)、これを「讃岐切」とする向きもあるが、今は「讃岐切」には含めないでおく。

206 菅原道真 白氏文集切

伝道真の「白氏文集切」というものは『古筆名葉集』類には載っていない。二つの国宝手鑑『翰墨城』・『藻塩草』に貼られたものと、陽明文庫に横六〇cm程の断簡があるだけである。本断簡は『翰墨城』所載の一葉である。よって以下は省略する。

207 菅原道真 白氏文集切

本断簡は『翰墨城』所載のもう一葉である。206の断簡と二

枚続きで、合わせて一編の詩になる。貼付の都合で分割したのであろう。ゆえに本断簡についても省略する。

208 菅原道真 式切

本断簡は前出の198で詳述した『藻塩草』所載の断簡の透写であるから、以下は省略する。

209 小野篁 山門切

『藻塩草』に於いて「小野篁」筆「山門切」と極められているものを基準にすると、『広弘明集』の断簡である。現在のところ、およそ十五葉が確認されるが、その全てが卷二十二の断簡である。本断簡も『広弘明集』卷二十二なので、「山門切」と判断できる。「法儀篇四一五 論形神」の一節(大正蔵253頁上段27行―中段1行) 三行である。縦二五・八、横六・三cm。界二一・六、野二・一cm。「翰林帖」の書き入れがある。(図9)



図9

(翻刻)

凡夫異也凡人一念忘彼七尺之時則目靡於視
足廢於踐當其忘目忘足与夫無目無足亦
何以異哉凡人之暫無本實有無未転瞬有己

210 小野篁 山門切

これも右と一連の「山門切」である。「弘明集」卷二十
二「金剛般若經集註序」(大正蔵259頁下段26行―260頁上段2
行)の一節五行である。縦二七・七、横一〇・四cm。界二
一・七、罫二・一cm。(図10)

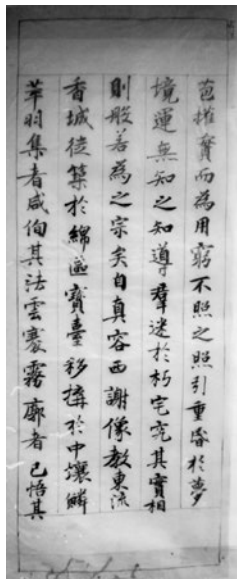


図10

(翻刻)

苞權實而為用窮不照之照引重昏於夢

境運無知之知導群迷於朽宅究其實相

則般若為之宗矣自真容西謝像教東流

香城徒築於綿區寶臺移構於中壤鱗

萃羽集者咸徇其法雲霧霧廊者已悟其

211 橘逸勢 漢籍切

橘逸勢は三筆の一人として能書の誉れが高い。真筆の遺品
『伊都内親王願文』が現存している。しかし古筆切となると、
思いの外少ない。よく知られているものは、『翰墨城』所収
の詩序切、『藻塩草』所収の「石山切」と名付けられた『春
秋経伝集解』であろうか。「石山切」の名称の由来は、石山
寺に『春秋経伝集解』の卷二六・二七が伝来しており、そこ
から切り出されたものであることによる。他には陽明文庫蔵
『大手鑑』に『瑜伽師地論』の断簡があるが、こちらはツレ
のない孤例である。さて、本断簡は『史記』「張丞相列伝」
の三行で、「石山切」とは異なる。見出しには、「橘逸勢 石
山切」と記されているが、「石山切」とは認められない。縦
二三・九、横七・二cm。界二〇・四、罫二・三cm。(図11)

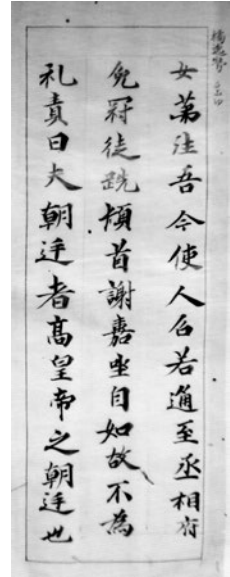


図11

(翻刻)

女第往吾今使人召若通至丞相府

免冠徒跣頓首謝嘉坐自如故不為

礼貞曰夫朝廷者高皇帝之朝廷也

212 橘逸勢 詩序切

これは前項で述べた『翰墨城』所収の「詩序切」である。
内容は『王勃集』の序である。以下を省略する。

213 橘逸勢 石山切

これが前述した『藻塩草』所収の『春秋経伝集解』巻二七
の断簡である。よって以下を省略する。

214 魚養 経切 (善光朱印経)

朝野魚養書写と伝える経の断簡の中に、もと元興寺一切経であったと云われる一群の写経がある。「善光」の朱印が押されているところから「善光朱印経」とも呼ばれる。かなりの量が残存しており、その奥書から、天平宝字二(三年)に写経生によって書写されたものであることが知られている。本断簡は『中阿含経』(大正蔵496頁中段6-10行)の四行である。『中阿含経』は巻九の奥書部分が残存しており、それによつて、天平宝字三年九月に一難宝郎という名の写経生が書写したことが分かる。縦二六・三、横九・五cm。(図12)

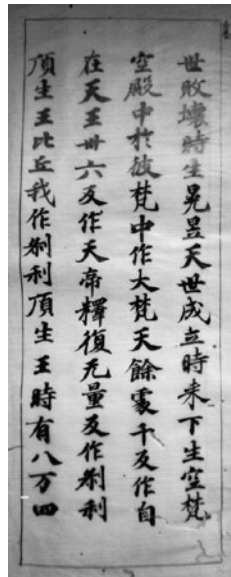


図12

(翻刻)

世敗壞時生晃昱天世成立時未下生空梵
空殿中於彼梵中作大梵天余處千反作自

在天王卅六反作天帝釈復無量反作刹利
頂生王比丘我作刹利頂生王時有八万四

215 魚養 御室切(2)

朝野魚養書写と伝える薬師寺伝来の『大般若経』の断簡を「御室切」と称するとされるが、実際の筆跡は十数人にわたるといふ。その一部が仁和寺に伝えられたことにより、「御室切」の名があるとされる。他方、『藻塩草』所載の断簡は『大智度論』の断簡で、「御室切」と極められている。この『大智度論』のツレも多く残存しており、やはり天平写経の特徴を示している。これも「御室切」とするなら、前者を(1)、後者を(2)と区別することにする。本断簡はその『藻塩草』所載の断簡の透写である。以下を省略する。

216 安倍小水磨 小水磨願経切

『大般若経』卷二二八(大正蔵702頁上段14―18行)の四行の断簡である。元の經典が埼玉県比企郡の慈光寺に一五二巻伝存しており、他に十数巻と断簡が残存している。そこから切り出された断簡を「小水磨願経」と呼んでいる。現存する奥書から、貞観十三年に上野国の安倍小水磨が、災害・悪疫

を除かんと発願して成ったと分かる。所蔵者等の注記はない。透写の左下欄外に料紙の特徴などの注記があるのだが、残念ながら解像度が悪く読めない。縦二四・五、横七・七cm。界二〇・一、罫二・一cm。(図13)

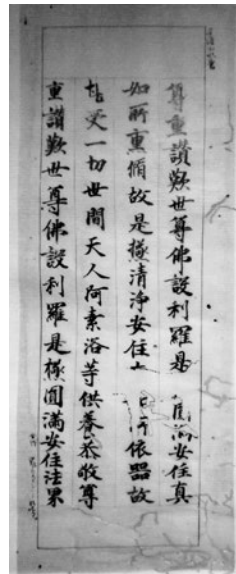


図13

(翻刻)

尊重讚歎世尊佛設利羅是極圓滿安住真
如所薰脩故是極清淨安住真
堪受一切世間天人阿素洛等供養恭敬尊
重讚歎世尊佛設利羅是極圓滿安住法界

217 最澄 経切(19)

見出しには「伝教大師」とあり、即ち最澄を指すことは言うまでもない。最澄真筆の遺品は幾つかあるが写経となると

真蹟と知られる物はない。伝「伝教大師」の経切としては「焼切」が有名であるが、その他の伝「伝教大師」の経切は無数にある。本断簡もそれらの一つである。内容は『法華經』「陀羅尼品」（大正蔵58頁中段27行―下段1行）の三行である。仮に「経切(19)」とした。縦二七・〇、横六・一cm。

(図14)



図14

(翻刻)

表帝^{三十一} 達磨波利差^{精部} 帝^{三十一} 僧伽涅^{三十一}
 瞿沙祢^{四十一} 婆舍婆舍輸地^{三十一} 曼哆邏^{三十一}
 曼哆邏叉夜多^{三十一} 郵樓哆^{三十一} 郵樓哆憍

218 最澄 経切(18)

本断簡も伝最澄の経切の中の一つ。『瑜伽師地論』卷七八（大正蔵732頁下段10―13行）の三行である。ここでは仮に

「経切(18)」とした。縦二二・四、横五・七cm。界一九・五、罫一・八cm。(図15)

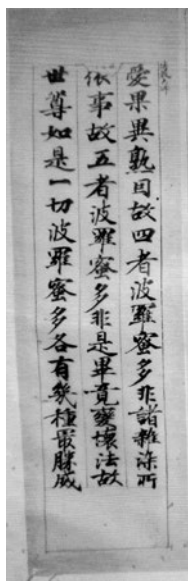


図15

(翻刻)

愛果異熟因故四者波羅蜜多非諸雜染所
 依事故五者波羅蜜多非是畢竟變壞法故
 世尊如是一切波羅蜜多各有幾種最勝威

219 空海 金剛般若経開題切

見出しには「弘法大師 南院切」とあるが、実は空海真蹟の『金剛般若経開題』の断簡二行である。空海真筆の遺品として極めて高く評価されている。京都国立博物館に六十三行、奈良国立博物館に三十八行が現存しており、その他はすべて断簡として伝わっている。本透写には「翰林帖」との出典表記がある。縦二六・六、横七・一cm。しかるに、この断簡の

原本は現在、飯島春敬氏のコレクシオン中にあるらしく、『春敬コレクシオン名品図録』51に写真が公開されている。同書によると、現在は別の二行と貼り合わせた四行になっている。寸法は縦二七二ミリとされているので、透写の親本が果たして原本そのものであったのか疑問なしとしないが、原本の図版は多くの展示図録類に掲載されているので、以下は省略する。

220 空海 仏書切³⁴

伝弘法大師筆の仏書切は無数にあるといっても過言ではない。本断簡もそうした物の一つである。ここには『法華論疏』巻下の部分（大正蔵822頁中段16―20行）が引用されている。末尾の三字「者此句」は『法華論疏』の文言ではなく、その前の文章が引用であることを示している。私に「仏書切³⁴」として整理している。透写元の所蔵者を「谷」と記している。縦二六・五、横五・三cm。界二四・二、罫二・〇cm。（図16）

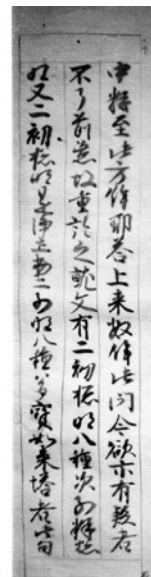


図16

（翻刻）

中釋至此方解耶答上来数解此門今欲示有疑者

不了前意故重論之就文有二初総明八種次別釋總

明又二初総明是浄土第二別明八種多寶如来塔者此句

221 魚養 仏書切

見出しには「弘法大師」と書いてあるが、ツレの多くは「魚養」としているのでそちらに従った。内容は『四分律刪繁補闕行事鈔』巻上「受欲是非篇4」（大正蔵9頁中段22―28行）である。今のところ、伝魚養筆の仏書切はほぼ全て『四分律刪繁補闕行事鈔』の断簡である。透写元の所蔵者を前項と同じく「谷」と記している。縦二七・二、横一六・二cm。（図17）

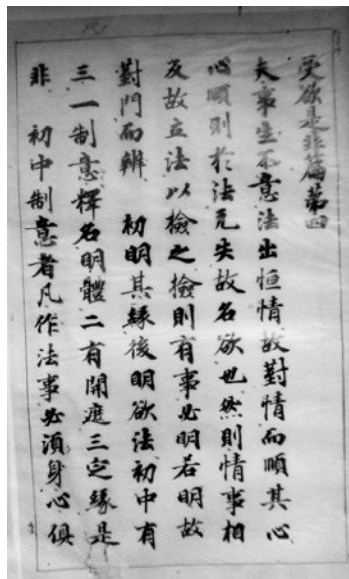


図17

(翻刻)

受欲是非篇第四

夫事生不意法出恒情故對情而順其心

心順則於法無失故名欲也然則情事相

反故立法以檢之檢則有事必明若明故

對門而弁 初明其緣後明欲法初中有

三二制意釋名明體二有開遮三定緣生

非 初中制意者凡作法事必須身心俱

222 空海 仏書切(2)

これは又別種の伝弘法大師(空海)筆仏書切である。内容は『梵網經古懺記』卷下末「無根謗毀戒第三」(大正藏71頁上段21—25行)又は『梵網戒本疏日珠抄』卷三十八「第十三無根謗人戒」(大正藏193頁上段28—下段3行)のいずれかである。両者同文の箇所なので、どちらであるか分からない。ツレも現時点で管見に入らないので、決定的根拠がない。縦二六・二cm、横五・八cm。界二三・四、野一・九cm。左下に「素紙」とある。(図18)

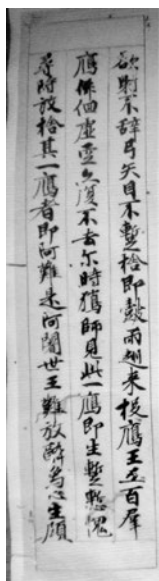


図18

(翻刻)

欲射不辭弓矢目不暫捨即鼓兩翅來投鷹王五百群

鷹徘徊虛空亦復不去爾時獵師見此一鷹即生暫慙愧

尋時放捨其一鷹者即阿難是阿闍世王難放醉象心生顧

223 空海 經切(9)

伝空海筆の經切は、『華嚴經』、『増一阿含經』などが多い

が、本断簡は『大宝積經』(大正蔵371頁中段26—27行)である。縦二四・〇、横三・七cm。界罫は虫損のため測定不能。所藏者を「谷」と記している。(図19)

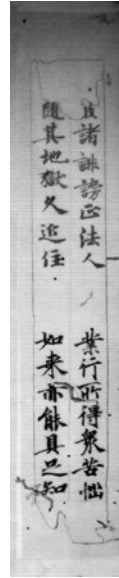


図19

(翻刻)

彼諸誹謗正法人

業行所得衆苦惱

隨其地獄久近住

如来亦能具足知

224 空海 南院切

こちらは正真正銘の「南院切」である。「新撰類林抄」の断簡で、唐代詩人の作品を集成したものである。元何巻あつたか不明で、京都国立博物館に巻四の残欠(国宝に指定)があり、九世紀の書写と見られている。真の書写者は不明であるが、断簡を弘法大師筆の「南院切」と称している。本断簡は『藻塩草』所載の断簡であるから、以下を省略する。

225 円仁 西塔切

『注維摩詰經』の断簡であるが、見出しには「慈覚大師西塔切」と記してある。本断簡は『藻塩草』所収断簡の透写である。「西塔切」によく似た経疏切で、「見ぬ世の友」に貼付されている断簡は「尼羯磨」であり、こちらを「無動寺切」と称する。その他にも伝慈覚大師の経疏切は様々な種類があるが、「西塔切」と「無動寺切」のツレが圧倒的に多い。以下を省略する。

226 良源 経切⁽¹⁴⁾

見出しには「良源」とのみある。伝良源筆の経切でツレの多いものは、「横川切」(紺紙金字『八十華嚴經』)と、「山上切」(紺紙金字『法華經』)とである。本断簡は『韓婆舍論』(大正蔵458頁下段29行—459頁上段5行)に該当するが、ツレは管見に入らない。縦二七・九、横一一・二cm。界二三・〇cm、罫二・四cm。原本所藏者を「谷」と記す。左下に「銀□」と記しているので、界罫が銀なのかもしれない。(図20)

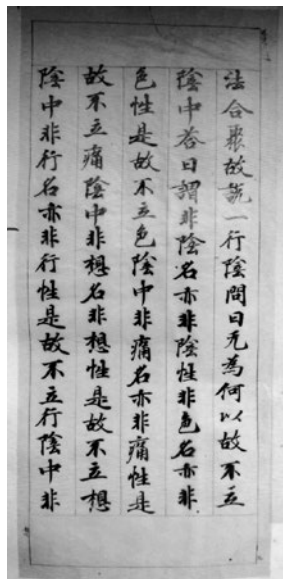


図20

(翻刻)

法合聚故說一行陰問曰無為何以故不立
 陰中答曰謂非陰名亦非陰性非色名亦非
 色性是故不立色陰中非痛名亦非痛性是
 故不立痛陰中非想名非想性是故不立想
 陰中非行名亦非行性是故不立行陰中非

227 聖宝 仏書切(4)

伝理源大師聖宝筆と称する仏書の断簡は極めて多いが、
 内容はバラバラである。梵字入りの書が比較的多いという印
 象はある。本断簡は七言偈四行で、ツレは管見に入らない。
 内容は『往生講式』(大正蔵883頁上段4行―5行)の二行で

ある。所蔵者を「谷」とする。縦二六・八、横七・〇cm。

(図21)

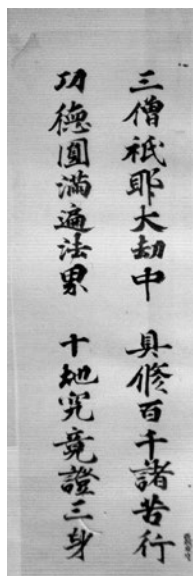


図21

(翻刻)

三僧祇耶大劫中 具修百千諸苦行
 功德圓滿遍法界 十地究竟證三身

228 俊仍 仏書切

未詳の仏書二行である。伝俊仍筆の仏書切で出典の判明す
 る物はほほえない。本断簡の所々に『受菩薩戒儀』と一致する
 語句が散見するので、何らかの「戒文」なのであろう。縦二
 八・〇、横四・九cm。(図22)

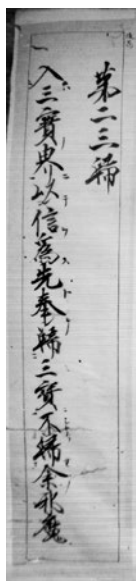


図22

(翻刻)

第二三婦

入三宝界以信為先奉婦三宝不婦余邪魔

229 覚猷 壬生切

見出しに「鳥羽僧正 壬生切」とある。未詳の仏書目録であるが、『藻塩草』所載の断簡である。『増補新撰古筆名葉集』にも載る程だが、他にツレの存在を知らない。以下省略する。

230 俊寛 古今集切(二)

『古今集』巻四(新編国歌大観215―219)の九行である。伝俊寛僧都筆の「古今集切」は非常に多くあり、『古筆学大成』は「三輪切」の他に「古今集切(二)」〜「同(十四)」まで十五種類を掲載している。実際にはそれ以外にも多種の「古今集切」が存在している。本断簡は右の(一)に該当する新出断簡である。縦三三・六、横一五・八cm。出典の書入は一文字あるが、読めない。(図23)

(翻刻)

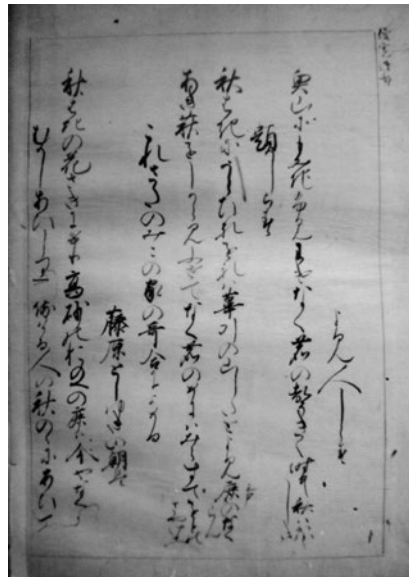


図23

よみ人しらす

奥山にもみちふみわけなく鹿の声きく時そ秋はかな」しき

題しらす

秋はきにうらひれをれば葦引の山したとよみ鹿のなく」らん

あき萩をしからみふせてなく鹿のめにはみえずてをとの」さやけさ

これさたのみこの家の哥合によめる

藤原としゆきの朝臣

秋はきの花さきにけり高砂のおのへの鹿は今やなく

むかしあひしり ■侍ける人の秋の、にあひて

231 法然 書状切

右傍に「法然上人」と記載している。他に伝法然筆の書状切というものは管見に入らない。右下欄外に「翰林」とある。散らし書きの書状の断片であるが、意味は解読不可である。縦二三・〇、横六・〇cm。(図24)

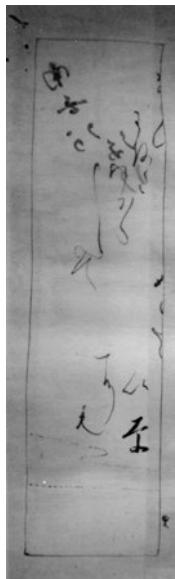


図24

(翻刻)

に月こ

行かく

いな

し候 に

そ も

232 一遍 藤沢切

右上の欄外に「一遍上人」とあり、右下欄外に「翰林」とある。絵巻詞書の断簡である。伝一遍筆の絵巻詞書の断簡は主に三種あり、「藤沢切」と「遊行上人縁起切」の二種は『一遍上人絵伝』の断簡。「靈山切」は『弘法大師伝』の断簡である。本断簡はこの内の「藤沢切」の二行。『一遍上人絵伝』の巻四第3段で、この後二行程間を置いて「見ぬ世の友」所載断簡が続き、さらにその直後に『濱千鳥』(出光美術館蔵)所載の断簡が接続する。縦二九・六、横六・六cm。「翰林」との注記がある。(図25)

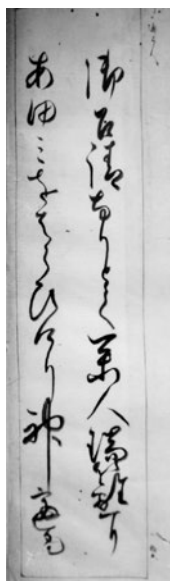


図25

(翻刻)

御召請なりとて萬人瑞籬に

あゆみをはこひけり神慮も

233 親鸞 八尾切

『藻塩草』所収断簡の透写である。この書物の奥書部分が『翰墨城』にあり、それらによって、本書の性格と伝来が明らかになった。重文手鑑『高松帖』所収「八尾切」の解説(落合博志氏)によって初めて解明された。その指摘に尽きるので、ここでは以下を省略する。

234 蓮如 和讃切(1)

『三帖和讃』の断簡である。伝蓮如筆の「和讃切」は3、4種類の筆跡に分けられそうだ。巻毎の分担執筆なのかもしれない。『三帖和讃』は蓮如によって初めて開版されたと考え、最も広く流布したゆえに、写本も蓮如の筆跡と見做されたのではないか。本断簡はその中で最も古筆切の残存数の多い「和讃切(1)」に属する。通し番号を付すと、「浄土和讃8」である。旧古典文学大系『親鸞集 日蓮集』の46頁(大正蔵655頁下段24行―656頁上段2行)に該当する。縦一七・三、横一一・九cm。出典所蔵者等に関する記述はない。(図26)

(翻刻)

佛光照耀最第一

光炎王佛トナツケタリ

三途ノ黒闇ヒラクナリ

大應供ヲ帰命セヨ

(猶、フリガナ等は省略した。)

235 夢窓疎石 多賀色紙

右上の見出しには「夢想国師 多賀色紙」とあり、左傍下

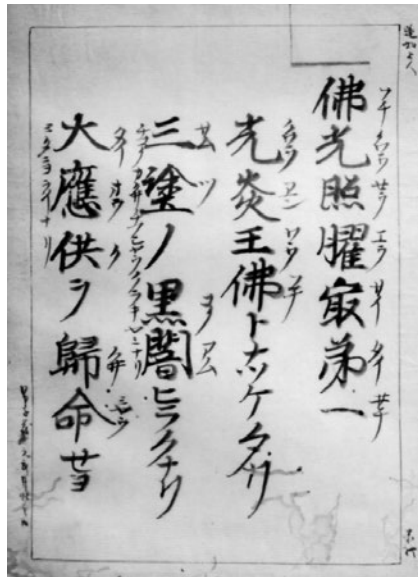


図26

部には「金銀小切箔霞」と記している。伝夢窓疎石筆の美麗な料紙を用いた色紙は古くから『古筆名葉集』類に記録されている。内容については『増補新撰古筆名葉集』に「多賀色紙 草書五言絶句金銀砂子」と記された。確かに五言四句の色紙が多いのだが、他に七言四句の色紙もあり、本断簡は八言四句であるから、必ずしも五言絶句に限る訳ではなさそうである。また、五言絶句のものも、ほぼ出典不明である。本透写には、朱と墨で霞と小切箔の文様も透写されている。縦一八・二、横一六・一cm。(図27)

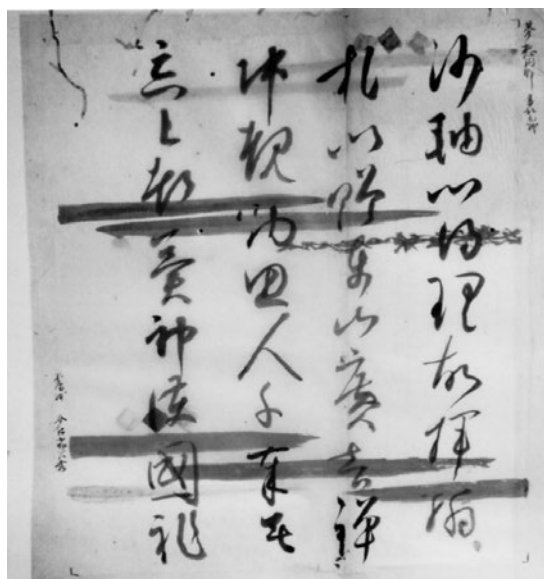


図27

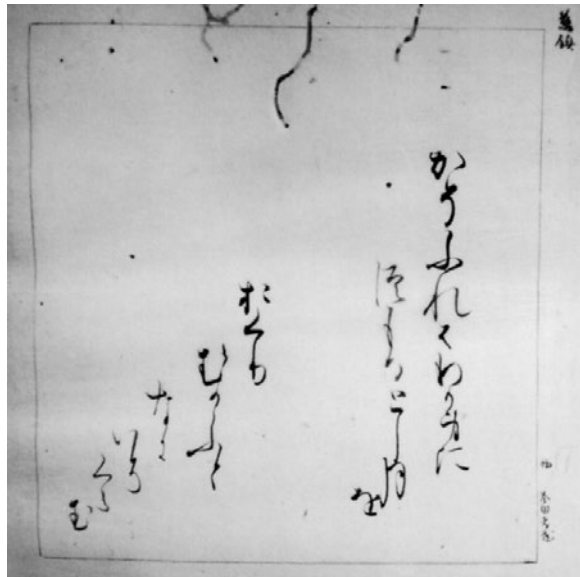
(翻刻)

沙軸心得理故揮翰
 札以贈東山廣智禪
 師觀□里人千奉□無
 忘上□冀神護國祚

(ほぼ意味不明で、恐らく誤読が多いであろう。)

236 慈円 色紙(二)

『拾遺集』巻四の一首(新編国歌大観番号261)を書写している。『古筆学大成』には、伝慈円筆の色紙が(一)と(二)に分類して掲げられているが、内容はいずれも『拾遺集』の歌が散し書きされている。本透写は恐らく(一)のツレであると思われる。右上の見出しには「慈鎮」、右下には「幅 益田孝蔵」と記されている。縦一四・六、横一三・九cm。(図28)



(翻刻)

かそうれはわか身に

つもととし月

を

おくり

図28

むかふと

なに

いそ

くら

む

237 慈円 円山切

見出しはないが、「慈鎮」の項の続きだから、伝慈円の断簡である。書写されているのは『新古今集』巻五(520―521)で、その筆跡を見ると所謂「円山切」の新出断簡と考えられる。「岡三郎氏所蔵」と記されている。縦一八・一、横一・九cm。横幅が多くのツレの断簡より五〜六cm程度狭いので、三〜四行程度が切除されているのであろう。(図29)

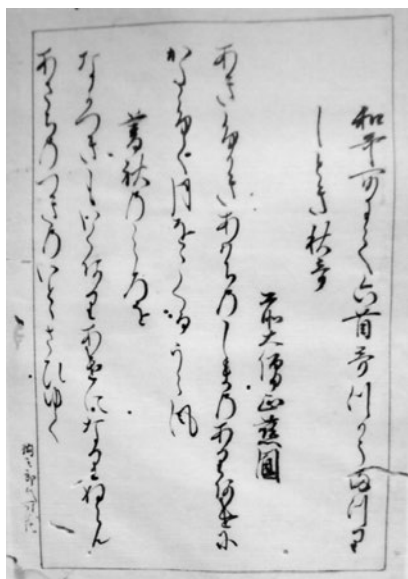


図29

(翻刻)

和哥所にて六首哥つかうまつり

しとき秋哥

前大僧正慈圓

あきふかきあはちのしまのありあけに

かたふく月を、くるうら風

暮秋のこゝろを

なかつきもいくありあけになりぬらん

あさちのつきのいと、さひゆく

238 慈円 古今集切(二)

『古今集』巻十七(新編国歌大観918—919)の8行の断簡である。右上欄外の見出しに「慈鎮 牛庵極 □代了伴極 加筆定家トアリ」と記している。確かに文中二箇所に加筆がある。この加筆を定家と見ているのであろう。左傍欄外に「具引ニテ茶地空□也左□紙」とある。料紙の中央に紙を継いだように縦線を引いている。その右半分には紙背に梅の樹が描かれている。原本の状態を写しているのか、他紙を流用したのか分かり辛い。ただし、他にそのような紙面をもつ断簡は管見に入らず、やはり流用の結果なのであろうか。筆跡や料紙の寸法を見る限り、『古筆学大成』が慈円筆「古今集切(二)」と分類しているものと一致する。縦二一・五、横一五・三cm。「谷」とある。(図30)

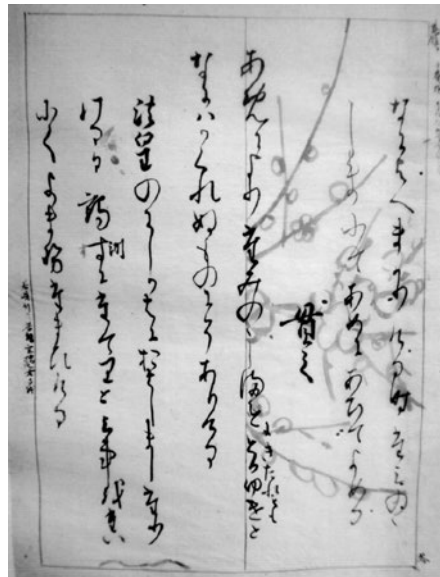


図30

(翻刻)

なにはへまかりける時たみの、
しまにてあめにあひてよめる

貫之

あめによりたみの、しまを今日ゆけと
なにはかくれぬものにそありける

法皇のにしかはにおはしましたり
ける日鶴すにたてりと云事をたい

にてよませたまひける

(七行目「す」の左傍に朱で「す」と書く)

239 慈円 古今集切(五)

右上に「慈鎮」と記すのみ。『古今集』卷十八(新編969—

970)の断簡である。『古筆学大成』の分類する図版を検すると、伝慈円筆「古今集切(五)」に該当する九行の新出断簡である。所蔵者等についての記載はない。縦二二・一、横一六・二cm。(図31)

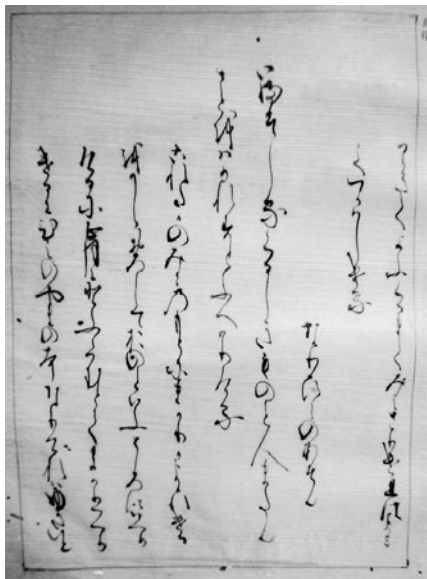


図31

(翻刻)

りきてよふくるまでみえさりければよみてつかはしける

なりひらのあそん

いまそしるくるしきものと人またん

さとははかれすとふへかりけり

これたかのみこのもとにまかりかよひける

をかしらおろしておのといふところにはへり

けるに正月にとふらはむとてまかりたり

けるにひえのやまの本なりければゆきいと

240 慈円 円山切

『新古今集』卷十四の断簡であるが、『藻塩草』所収の断簡であるから、以下を省略する。

241 西行 相輪寺切

『月詣集』の断簡であるが、『私撰集残卷集成』18に写真があるので、久曾神昇氏の所蔵であったことが分かる。よって以下省略する。

242 西行 歌集切

右上に「西行」、右下に「谷」、左下に「□□□紙」とあるばかりで、如何なる歌集か不明の私家集の断簡。四首の和歌があり、その内の二首は贈答歌であるが、どちらも他の歌集に見当たらない。ツレとなる同様の私家集も今のところ見当たらない。未詳私歌集とするに留める。縦一三・二、横一四・九cm。(図32)

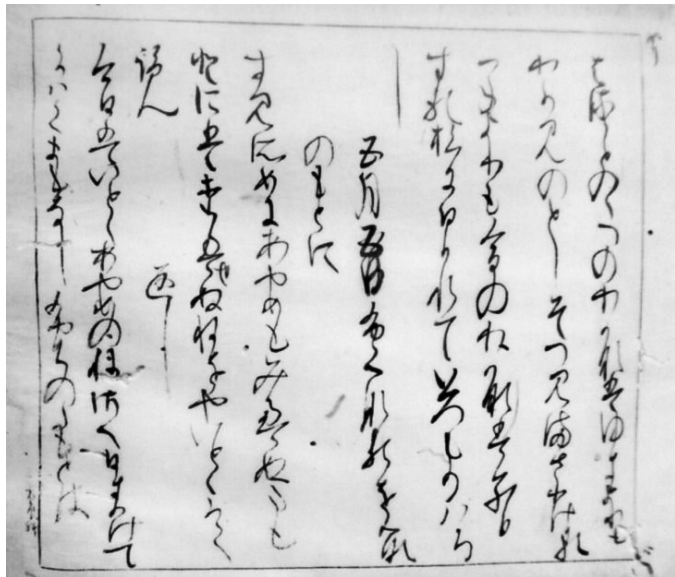


図32

(翻刻)

はることのゝへのわかなはゆきよりも

わかみのとしそつみまさりける
つねよりもはるのわかかなは子日
する松にひかれていろもかわら
し

五月五日ふくなそをんな

のもとに

すみそめにあやめもみえぬたも

とにはきえせぬねをやいと、かく

覧 返し

今日はいと、あやめのねさへひきかけて

かはくまもなしふちのたもとは

243 西行 五首切

伝西行筆の『右大臣家百首』（526—528*）の3首。田中塊

堂『つちくれ』に掲載された断簡で、『古筆学大成』も写真

を転載している。よって以下省略する。

*『新編国歌大観』に未収録の定数歌なので、歌番号は小島孝

之「治承二年右大臣家百首佚文集成」（『講座平安文学論究第
五輯』）の番号によった。

244 西行 源氏物語切（一）

『源氏物語』宿木巻の断簡。伝西行の「源氏物語切」は数
種類あるが、最も残存数の多い（一）の断簡である。『古筆
学大成』が「個人蔵手鑑」として既に写真を搭載しているの
で、以下省略する。

245 西行 白河切

伝西行筆古筆切を代表する『後撰集』の断簡で、百枚以上
の図版が紹介されているが、巻一—巻十の範囲しかなく、巻
十一以後の断簡は知られていない。まとまってどこかに現存
しているか、既に失われたか、前者であることを祈りたい。
本断簡は既に『古筆学大成』が個人蔵として写真を掲載して
いるので、以下を省略する。

246 西行 出雲切

『殷富門院大輔百首』の断簡である。『翰墨城』に収載の断
簡であるから、以下を省略する。

247 西行 白河切

『後撰集』巻一の断簡。『古筆学大成』や『日本名跡叢刊』

に、「住吉家讀集手鑑」として写真が公開されているので、これも以下を省略する。

248 西行 歌集切

未詳の歌集切である。『寛平御時后宮歌合』の歌だけを抜粋して列挙したもの(150・127―129)で、ツレの存在を知らない。右上の見出しに「西行法師」とあり、右下に「谷」とある。縦二八・五、横一四・七cm。(図33)

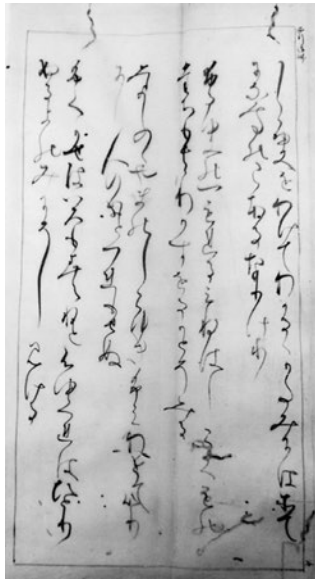


図33

(翻刻)

しらゆきをわけてわかる、かたみにはそて
になみたのこほるなりけり

ふるゆきのつもれるみねはしらくもの

たちもさわかすをるかそそみる

みよしの、やまのしらゆきふみわけていり

にし人のおとつれもせぬ

ふくかせはいろもみえねとふゆくれはひとり

ぬるよのみにそしみける

249 西行 後撰集切(一)

この断簡については、注記が一切ないので、どういふつもりで写したのかは分からない。この位置に貼付したのが親美翁自身だったかどうか定かではないが、恐らくここに配置した時は、「白河切」と考えたのであろうと推察する。しかし、これは『古筆学大成』が、「西行 後撰集切(一)」としたもののツレであって、「白河切」ではない。このツレはもう一葉知られているが、幸いにも「白河切」は前述の通り極めて多くの断簡が現存しているので同一箇所と比較が可能である。そこで、「白河切」と「後撰集切(一)」の同一箇所を比較すると、「後撰集切(一)」が「白河切」を模写したことが一目瞭然に分かる。両者の間に若干の相違があるので、正確な模写なのではなくて、時に変更を加えながら写した摸本

とすべきものようである。『古筆学大成』が写真を掲載しているので、以下を省略する。

250 西行 白河切

これは「白河切」である。原本は『翰墨城』所載の断簡なので、以下を省略する。

251 西行 白河切

これも「白河切」の『後撰集』巻二の断簡である。『古筆学大成』を初め、多くの図版が紹介されており、徳川美術館における展示「かなー王朝の美」にも出品されているので、以下を省略する。

252 寂蓮 梁塵秘抄切

右上に「寂蓮」、左下に「翰」とある。「翰林帖」のことか。罫線と下絵のある優美な古筆切であり、丁寧な墨で下絵を描き、朱で、印やルビを書き込んでいる。「法門歌」（旧古典大系の番号208）で、『古筆学大成』初め多くの紹介がある。『中世音楽史論叢』所収の古谷稔論文には「穂久邇文庫蔵」とさされている。以下を省略する。

253 寂蓮 右衛門切

伝寂蓮筆の『古今集』断簡で所謂「右衛門切」である。「右衛門切」は天地左右を匡郭の単線で区切った紙面の枠内に本文を書写する形式で、歌集としては、他に伝飛鳥井雅経筆（実は藤原教長筆）の「今城切」他数種にのみ見られるかなり珍しい書写形式の写本である。本論文では天地左右の匡郭を便宜的に界・枠と称することにす。本断簡は田中塊堂氏の旧蔵で、『古筆学大成』が「つちくれ」の写真を転載している。よって以下を省略する。

254 寂蓮 田歌切

古代民衆歌謡を集成した書の断簡であるが、完本が存在せずのような書物であったか分からない。「田植歌」もあるが、そうでない歌もあり、『梁塵秘抄』の一部なのではないかという説もあるようだ。本断簡は『古筆学大成』が「個人蔵」として写真を掲載しているので、以下省略する。

255 寂蓮 右衛門切

これは『藻塩草』所載の断簡であるから、以下省略する。

256 寂蓮 右衛門切

これも『古筆学大成』が「個人蔵手鑑」として写真を掲載しているので、以下を省略する。

257 寂蓮 右衛門切類切

「右衛門切」は『古今集』の断簡であるが、「右衛門切」と同体裁で『詞華集』や『千載集』を写した断簡があり、これらを「右衛門切類切」と呼ぶことにする。本断簡は『詞華集』で、『古筆学大成』にも「個人蔵」として写真が掲載されているから、以下を省略する。

258 寂蓮 大色紙

色紙形の大きな料紙に一首の歌を散し書きにしたものを「大色紙」と呼んでいるが、本来は色紙ではなく卷子本を切り取って色紙形にしたものである。『古筆学大成』には、伝寂蓮の「大色紙」(一)、『古今集』、(二)、『後拾遺集』『金葉集』『詞華集』などが挙げられているが、本断簡は取り上げられていない。本断簡は『拾遺集』卷二(124)である。大正から昭和初期に何度も入札会に出品されているが、現在は

所在不明らしい。縦二二・七、横一九・五cm。透写の右に何やら文章が記されているが読めない。(図34)

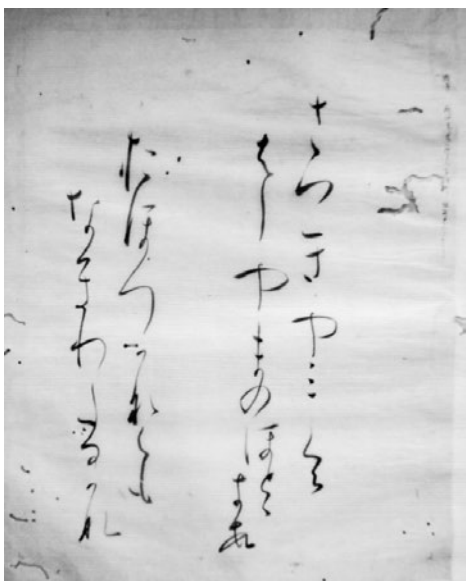


図34

(翻刻)

さつきやみくら

はしやまのほと、

きす

おほつかなかも

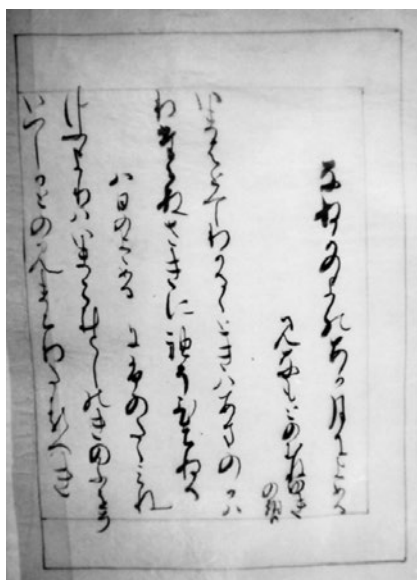
なきわたるかな

259 寂蓮 右衛門切

これも「右衛門切」『古今集』卷十五(754-756)で、『古筆学大成』に「桑山美術館蔵」として写真が掲載されているので、以下省略する。

260 寂蓮 右衛門切

これは『古今集』卷四(182-183)の新出断簡である。注記の類は一切ない。縦二〇・二、横一四・一cm。界一六・一、
 枠一二・六cm(図35)



(翻刻)

なぬかのよのあか月によめる

みなもとのむねゆき

の朝臣

いまはとてわかるゝときはあまのかは
 わたらぬさきに袖そひちぬる

八日のよ、める にふのた、みね

けふよりはいまこむとしのきのふをそ
 いつしかとのみまちわたるへき

図35

261 寂蓮 右衛門切

本断簡は『古今集』卷十三(664—665)で、これも新出の「右衛門切」である。この断簡にも一切の注記類がない。縦二〇・六、横一三・九cm。界一六・一、枠二二・六cm。(図

36)

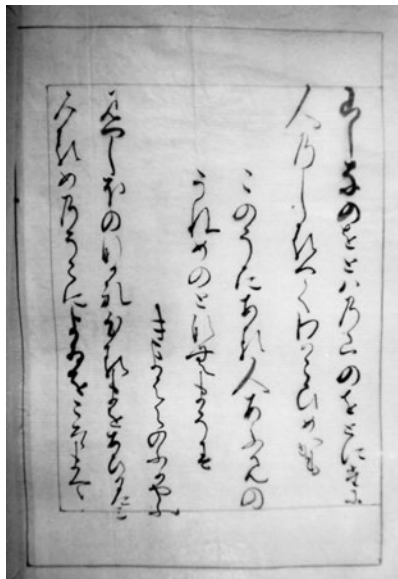


図36

(翻刻)

山しなのをとほの山のをとにたに
人のしるへくわかこひめかも

このうたある人あふみの
うねめとなむまうす

きよはらのふかやぶ

みつしほのなかれひるまをあひかたみ
みるめのうらによるをこそまで

262 寂蓮 右衛門切

『古今集』卷十七(877—879)の断簡で、これも「右衛門切」の新出断簡である。これにも注記の類は一切ない。縦二〇・五、横一四・一cm。界一六・〇、枠二二・五cm。(図37)

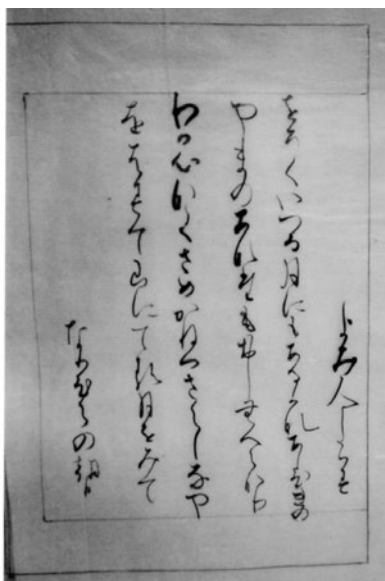


図37

(翻刻)

よみ人しらす

をそくいづる月にもあるかなあしひきの

やまのあなたもおしむへらなり

わか心なくさめかねつさらしなや

をはすて山にてる月をみて

なりひらの朝臣

263 寂蓮 新古今集切 (二)

『新古今集』巻十一(1024—1025)の断簡。寂蓮は和歌所寄人の一員に加えられ、『新古今集』撰者に名を連ねたが、完成を見ずして没したので、『新古今集』完本の筆者になれる訳がない。「寂蓮」の極めが誤りであることは明白であるが、古筆切の鑑定にはよくあることである。『古筆学大成』は伝寂蓮筆の「新古今集切」を(一)～(四)に分類するが、(一)、(二)が大部分を占める。本断簡はその(二)に相当し、『古筆切影印解説Ⅲ新古今集』に写真が掲載されており、久曾神昇氏の旧蔵であったと知られる。従って以下を省略する。

264 寂蓮 色紙 (一)

『古今集』巻二(76)の歌を散し書きにしたもの。『古筆学大成』が「伝寂蓮筆色紙(一)」としたものである。卷子本から色紙形に切り出したもので、金銀砂子を撒き、切箔・野毛などを散らした豪華な装飾を施した書物で、巻物であった時はさぞかし豪華な書物であったろうと想像される。『古筆学大成』の解説で、小松茂美氏は国宝『源氏物語絵巻』の「蓬生」「総合」の巻の詞書と同筆であるとしている。三十回「手ががみ」、「かな古筆てかがみ」、「日本名筆全集」等に図版があるので、以下を省略する。

265 寂蓮 大坂切

『和漢朗詠集』巻上(307—310・316)の断簡。元は卷子本であった。末尾の和歌一首は歌番号が飛んでいることで分かるように、後ろの方から切り取って漢詩の後に貼り合わせている。古筆切を装幀する際に、漢詩と和歌を同時に鑑賞できるように切り貼りすることはしばしば行われている。巧妙に貼り合わせているので、容易に継ぎ目が分からない場合があることに注意を要する。『古筆学大成』は本断簡を収録していないが、複製手鑑の『月影帖』『日ぐらし』等に図版がある

ので、以下を省略する。

266 寂蓮 佐野切

『賀茂社歌合』(57―58)の断簡。治承二年三月十五日に賀茂別雷社で神主賀茂重保によって催された歌合の浄書本原本である。寂蓮もこの歌合に参加しているが、浄書本の真の筆者ではないと思われる。原本は金・銀泥で折枝・鳥などを描いた料紙に丁寧な書写された巻物で、当透写も下絵を墨で入念に写している。この断簡は『翰墨城』に押されている。なお、原本内の四十首を収める零巻が藤田美術館に所蔵されているそうである。以下を省略する。

267 寂蓮 後拾遺集切(一)

『後拾遺集』巻四(287―289)の断簡である。『古筆名葉集』の類には、寂蓮の項に「四半 後拾遺」というものが記されており、『古筆学大成』が「後拾遺集切(一)」としているものがそれに当たるのではないかと考えられる。本断簡もその新出断簡である。なお、『古筆学大成』が「後拾遺集切(二)」としている断簡は、巻十八が完本で伝わっていたのを昭和に入って京都で分割されたので「都切」と命名された。

他方、青木信寅氏旧蔵本であった巻十五が近年分割されて「青木切」と命名された。よって、「都切」と「青木切」とは呼称は違っても共に「後拾遺集切(二)」のツレである。また、平成四年の東京古典会に出品された巻十一―巻十三の零本(現所蔵者不明)はこの青木切本の僚巻である可能性がありそうである。ともあれ、本断簡は、縦二三・二、横一三・二cmである。出典の注記はない。(図38)

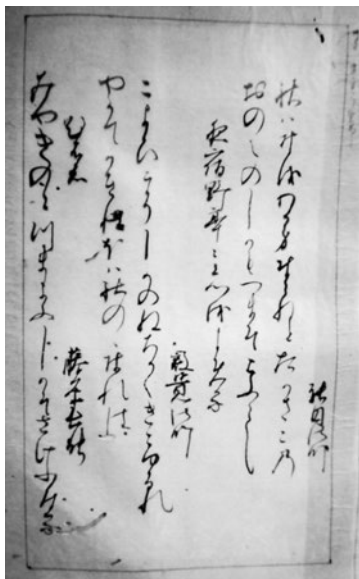


図38

(翻刻)

能因法師

秋はなをわか身ならねとたかさこの

おのえのしかもつまそこふらし

夜宿野亭と云心をよめる

叡覚法師

こよひこそしかのねちかくきこゆなれ

やかてかき■ほは秋の、なれは

題不知 藤原長能

みやきにつまよふしかそさけふなる

(二首目二行目の■は書き損じて上からなぞったが、読

めないのて下に書き直したらしい)

268 寂然 村雲切

右下に「寂然 加筆定家」とあり、左下に「中銀切箔張」

とある。『貫之集』(私家集大成I 708—710)の断簡である。

「村雲切」については研究が積み上げられており、詳細はそれらに譲る(杉谷寿郎氏『平安私家集研究』、田中登氏「素寂本貫之集の意義」『関西大学文学論集』54所収その他)。本断簡は『古筆学大成』に「個人蔵手鑑」として原寸大の写真が掲載されているので、以下を省略する。

269 寂然 村雲切

これも「村雲切」で、『貫之集』(I 480—481)の新出断簡である。右上に「大原寂然」、右下に「谷」とあり、左下に「中切箔銀多ク金少々入」とあって、左側傍記に「左二詞少シアリシヲケヅリシアトアリ」と書いている。写真に見るように、本断簡は本文が六行で、左側に二行分程度の空白がある。巻末でもないのに不自然な空白である。親美翁のこの書入れによれば、この空白部分には、次の歌の詞書「いねかりほせる」が書かれていたのを削消したのであろう。さらに次の歌の上句もあつたかもしれないが、それは分からない。縦一六・五、横一三・二cm。(図39)

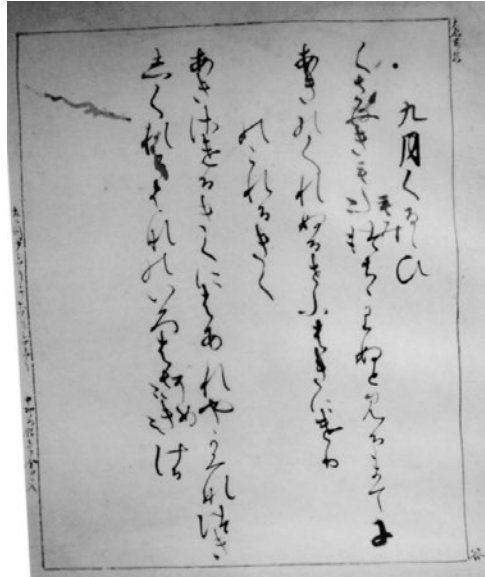


図39

(翻刻)

九月くる、ひ

くさもきも木^{もみ}ち、りぬとみるまでに

秋のくれぬるけふはきにけり

のこれるきく

あきさけるきくにはあれやかみなつき

しくれそはなのいろは^{そめ}まける

(文字の左傍にミセケチの符号「シ」があるが、表記できないので二重線で代用した)

270 寂念 松本切

『後拾遺集』巻十四(786—787)の断簡である。右上に「寂念 松本切」、左下に「翰」との注記がある。注記の通り、所謂「松本切」である。この断簡は、『古筆切影印解説Ⅱ六勅撰集編』の巻頭口絵に原色刷で掲載されている。久曾神昇氏の旧蔵である。「翰」は「翰林帖」を指すのであろう。以下を省略する。

以上で『名葉集 下』の前半を紹介し終えたことになる。紙数も大幅に超過している故、今回はここまでにとどめたい。

付記

前稿(4)においても私の誤読、ケアレミスが多数指摘されているので、ここに一覧を付すことをお許し頂きたい。

111 □華傳父又↓法華傳文又

138 伯細之袖不敷而↓伯細之袖不敷而

141 郷国眇茫孤戌暁↓郷国眇茫孤戌暁

144 さきちりあかぬ↓さきちりあきぬすき

158 百首哥たてまつりしに↓百首哥たてまつりし時

159 此哥在人云柿本↓此哥或人云柿本

167 カワヒシカルラム↓カワヒシカルラムココラワヒシキ

(注) ルビの一字目は訂正の符号とみるべきかもしれない

れない

172 の四十かは九条。家にて↓の四十賀九条。家にて

右大臣左大臣に卅七↓右大臣左大臣卅七

173 我はた、はる↓我はた、はな

191 麗景殿前女房↓麗景殿前女御

いきそかへらぬ↓いきもかへらぬ

右の多くは細貝宗弘氏のご指摘による。記して感謝申し上げます。

補記

初校を見て下さった山田尚子先生のご教示により、211の「橘逸勢 漢籍切」について当断簡が石山寺蔵の『史記』（国宝）のツレである事が分かった。石山寺蔵本の『史記』は巻九十六張丞相列伝・巻九十七躰生陸賈列伝の部分であり、そ

の張丞相列伝の前半部を欠いている。当断簡はまさにその欠脱部に相当する。国会図書館のデジタルコレクションで昭和十三年の古典保存会の複製を見ることが出来、字詰め、書体等、同一写本のツレであると考えて間違いないと思われる。

山田孝雄の解題によれば、「恐らくは奈良朝に於ける本邦写経生の書写なるべし」とある。また、私は「本断簡は：「石山切」とは異なる」としたが、本来石山寺から出た断簡であるゆえ、むしろ「石山切」の呼称は相応しいものというべきであった。

あらためて、細貝宗弘、山田尚子両先生には深く感謝申し上げます。

(こじま・たかゆき 成城大学名誉教授)